り、町名を百姓町と呼べりと云ひ傳へたり。按ずるに、邑民を百姓といふはいと上代よりの事にて、日本紀天武卷に、五年四月詔美濃國司曰。在礪杵郡紀臣阿佐磨之子遷東國。即爲其國之百姓。と見たるなどにて知らる。神代卷に、大己貴命與少彥名命。戮力一心。經營天下。復爲顯見蒼生及畜產。則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆虫之災異。則定其瘞厭之法。是以百姓至今咸蒙恩顧。とある百姓をば、おんたからと訓めり。おんたからは大實の義なり。書經に所寶惟賢といへるが如しといへり。さて百姓は諸姓諸氏の意にて、衆庶の義なり。故に日本紀繼體の卷には、黎庶をおんたからとよみ、推古卷には、公民或は兆民をもよめり。

○石浦村百姓來歴

此の村は、石浦郷七ヶ村の一村也。石浦神社に傳來せる、慶長十一年八月石浦觀音の事に付き石浦七ヶ村百姓の連判せる訴狀に、慶長七年三月十一日に石うら村之住人與三兵衛・宗右衛門以兩使彼御坊へ相届候へば云々。など記載して、其の連署に石浦村彦兵衛とあり。是當時の村肝煎なる

べし。さて石浦の村落は、そのかみ上下二ヶ所に家建をなし、上石浦村・下石浦村と呼べり。寛文十一年四月長谷山慈光院由來書に、石浦庄内上石浦村・下石浦村・保嶋村・笠舞村・木新保村・今市村・しめの村七村之住人氏神と仰ぎ、彼地に在住之人至于今參詣仕。とあり。又貞享二年の由來書にも、當寺觀音堂は、石川郡石浦之庄内笠舞・保嶋・上石浦・下石浦・今市・示野・木新保、以上七ヶ村之人民奉尊敬由、古來申傳候。と記載すれど、慶長十一年八月石浦七村百姓連判狀に、石うら村彦兵衛・笠舞村久介・保嶋村五右衛門・朱免野村八右衛門・山崎村徳右衛門・今市村平左衛門・木・新保村甚兵衛。とありて、石浦・山崎・朱免野・保嶋・笠舞・今市・木新保の七村をば、石浦七ヶ村とせり。されば右由來書共に、山崎村を書漏らし、石浦上・下二村となしたるは、過聞なる事いちじるし。故に明和二年の慈光院上申書に、石浦村は上・下に別れ、今の石浦町に下石浦村、百姓町に上石浦村有之、上・下一在所也。と載せたり。是其の實説にて、今の笠舞村も、上笠舞・下笠舞とて、村落二ヶ所に分れつれど、一村となせるが如し。其の村地は高澤忠順の金

澤事蹟必録に、石浦村は今安房殿町より長町へかけ、法船寺馬場の邊まで、昔の石浦村地なり。此村地今は悉く武士・工・商の屋敷と成る也。といへり。今按ずるに、下石浦の地跡なる石浦町・長町邊は、早くより悉く町地と成り、上石浦の地は後々までありし故に、石浦の村民百姓町の裏町に長く残りて、少數の百姓名の者ありたり。といへり。故に改作所舊記に載せたる、寛文五年四月石浦村彦兵衛・與三右衛門等連署願書に、私共在所御高之内、金澤廻り百姓共相對を以て地子におろし、家をつくらせ申分、並御用地に被召上御替地共に、今程家數多く成り云々。とあり。又同年の覺書に、散小物成御役銀、百姓地相對下し之内、當年町方へ付渡り、地子肝煎之裁許分に罷成る。とありて、此の時地子肝煎の裁許分に成りたるは、今いふ石浦新町なるべし。故に元祿九年の地子町肝煎裁許附にも、石浦新町を載せたり。此の町地は後々まで相對請地にて、地子米を取立てしかど、廢藩置縣の後漸く市中一般の町地と成りたり。さて右の如く寛文以來追々相對請地となし、家屋を建てたりしかど、尙此の後々迄も石浦村の百姓とて僅に残れり。

延寶六年二月の覺書に、火事之時御堂形懸り人足百九十九人、内三人石浦村。と見え、貞享四年二月の書札に、石川郡石浦村與三右衛門方借宅人自害の事を載せたり。三州名跡誌に、今の百姓町の邊、昔は石浦村とて農家なりしが、町地と成る。于今其の舊民の残り三軒在りて、石浦村誰と名乗り、郡方の支配なり。本多房州下屋敷も此の村地にて、法華宗本行寺・眞言宗慈光院は、今以て所附を石川郡石浦村之内と記す舊例なりと見え、金澤事蹟必録にも、石浦村は今の安房殿町より長町へかけて、法船寺馬場の邊まで、昔の村地也。此の村地今は悉く武士・工・商の屋敷と成り、纔に百姓町の中に石浦村百姓とて三・四軒残り。とあり。柴野美啓の龜尾記に云ふ。古へ石浦村は大邑にて、其田地廣く、今の石浦新町といふ町地より、本多氏下邸石浦新町等皆其地内也と云ふ。金澤城下日々繁茂し、四民の居邸と成るがゆゑに、石浦の村地之が爲に揚地と成り、今は田地の草高五つ免にて、僅に廿九名遺れり。此村高も今は他邑の高に結び込み、其農民も又町人と成りて、其地を百姓町とは稱すと舊記に載せたり。此町地に今も石浦村の農民